

林 征二（はやし・せいじ）

1、プロフィール

昭和 43 年青森市に移り住み、永六輔に認められて「話の特集」などに連載。『ヒモ』『ちんぴら』『津軽の女』の著作を残したが、急性肝腎症候群により 38 歳の若さで急逝した。

<生没>

1938(昭和 13)年7月 15 日～1977(昭和 52)年6月 14 日

<代表作>

『ヒモ』(大和書房、昭和 46 年) 『ちんぴら』(大和書房、49 年) 『津軽の女』(北の街社、49 年) 『林征二の世界』(長部日出雄編、津軽書房、55 年)

<青森との関わり>

亡くなるまでの9年間、青森市で暮らす。「あかりしび」(北の街社)に連載した「津軽の女」は単行本化された。

2、作家解説

小説家、エッセイスト。昭和 13 年奈良市に生まれる(生前、昭和 15 年生まれと自称していた)。本名・並川征司。父は新聞記者から革新政党的の県会議員になった人物だが、林征二の家庭は妾宅だった。並川は父親の姓で、ペンネームの林は母親の姓である。

県立奈良高校時代からたびたび問題を起こし、立命館大学文学部に入学するも中退。一時、暴力団柳川組の組員であった。組を抜けて昭和 40 年頃からストリップの世界に入り、踊り子の伴侶(世間でいうヒモ)として旅回りの生活をする。

43 年、踊り子のアヤ葉月(本名君子、後に結婚)とともに、青森駅裏にあったストリップ劇場「日江劇場」に草鞋を脱いだ。劇場で働きながら、永六輔のラジオ番組へ手紙を出し続けて、押しかけ弟子となる。永から文章を書くことを勧められ、

46 年から「話の特集」に「ヒモ」「ちんぴら」を連載。好評を博し、ともに単行本になった。「週刊サンケイ」「宝島」「小説マガジン」などにも執筆している。

いきなりのメジャーデビューであるが、実は小学生の頃から文学少年で、日記や数多くの習作を書き続けてきた土台があった。酒席で乱れることが多かったものの、生来の正義感や人懐こさから中央や青森で多くの知己を得、愛された。青森では、「あかりしび」(北の街社)、「青森 NOW」(青森大学)などに執筆。「従軍慰安婦や旅芸人の話を書きたい」と資料を集めていた中、急性肝腎症候群により 38 歳の若さで急逝した。

特異な経歴で取り上げられがちだが、彼が常に強く心に思っていたのは「差別」の問題であった。没後の 55 年に出版された『林征二の世界』の編者を務めた長部日出雄はあとがきで、「かれが好んで作品の舞台に選んだ日の当たらぬ場所、見捨てられ、忘れられた場所は、(中略)いっそう日の当たらぬところへ押しこめられ、見捨てられ、忘れ去られていきそうなようすだ。(中略)林征二の書き残したものは、いまますます貴重な価値を持ちつつあるのではないだろうか」と記している。

3、資料紹介

○『ヒモ』

図書

1971(昭和 46)年 12 月 15 日

190 mm × 130 mm

「話の特集」に連載した「ヒモ」シリーズを、大和書房が単行本として出版した林征二の処女作。装丁・イラストは灘本唯人。小池一雄らによって劇画本となったほか、昭和 50 年、森崎東監督・山城新伍主演で「特出しヒモ天国」(東映)として映画化された。